

全道各地に育つ 産業クラスター活動

ルライター 滝川 康治

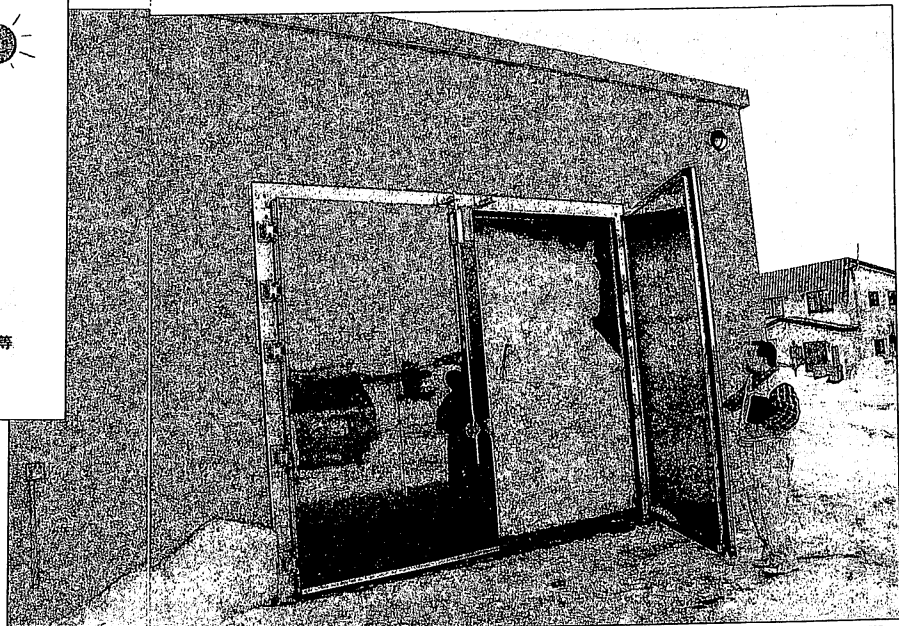
官依存から脱却なるか 地域資源で起業を模索

産学官の連携で 雪冷房を具体化

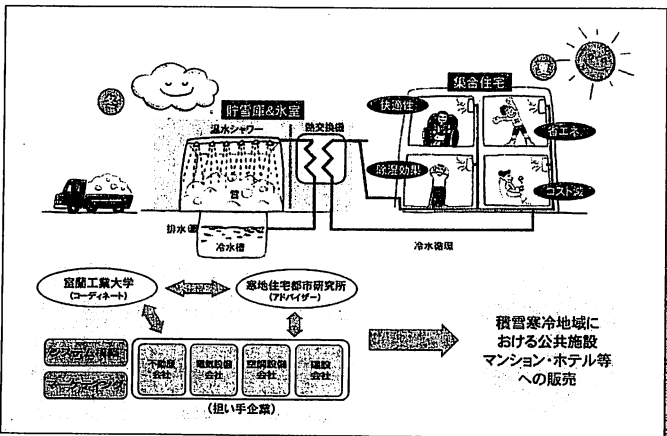
美唄市内で建設中の賃貸マンション「ウエストパレス」(鉄筋コンクリート6階建て、24戸)で、雪を冷房に活用する試みが始まった。三月中旬、マンション隣の貯雪庫(写真参照)に百トンほどの雪を投入済み。夏は住宅の冷房用に、秋から冬は野菜などの貯蔵庫として使う独自の取り組みである。

産業クラスター活動を支える財団法人・北海道地域技術振興センター(略称・HOKTAC)が地元企業と共同で進める「ビジネスプラン推進事業」の一つ。システムの考案者は、沼田町のもみ貯蔵施設づくりなどの実績をも

産学官の連携で、公共事業に偏重した中央依存型経済からの脱却をめざす、産業クラスター活動が各地で活発化している。模索のなかから、具体的なプロジェクトも立ち上がってきた。美唄市での「雪冷房システム」の試みや、「森林クラスター」を追求する下川町の事例などを紹介しながら、課題を考える。



美唄市内のマンション敷地の一角に建設した貯雪庫。100トンの雪を入れておき、冷房や野菜の貯蔵などに活用する。



室蘭工大の研究者が考案した「雪冷房システム」の概念図

マに勉強を重ねてきた。マンションの建主で不動産業を営む永桶裕明さん(44)は、研究会の中心メンバーである。昨年初め、「住宅で雪冷房をできないか?」という話になり、会のなかにプロジェクトを組んで調査を始めた。永桶さんにはマンション建設計画があり、それと堀山さんのアイ

企業を育て実行させるまでやるのは、本来の補助金の姿と思う」と永桶さんが評価する。このモデル事業は道の財政支援を受けているが、従来型の補助金システムとはかなり違う。官依存の企業経営から脱皮する可能性を秘めた手法になりそうだ。永桶さんは最近、雪冷房システムの

つ、室蘭工大助教授の堀山政良さんだ。貯雪庫は床面積六十四平方メートル、高さ四・五メートルの大きさがある。夏には、床下の水槽にためた雪解け水の冷熱を利用し、熱交換機を通して一度ほどに冷えた不凍液がパイプで各戸に送られ、居間に設置したファンによって二四、五度の室温に保たれる仕組み。秋以降は残った雪を利用する。空いたスペースに野菜類を保管し、出荷調整や熟成に役立てたり、温蔵庫に活用する道も探っている。

新産業づくりで 経済の活性化へ

「これは中小企業をバックアップする良い方法。現地会議もある。」「これは中小企業をバックアップする良い方法。現地会議もある。」

デアが結びついたわけだ。このシステム、設備費に二千万円ほどかかった。永桶さんは、補助金を使うことを模索したが、行政はまだ雪に価値を見いだしていなかったとか。強力な助っ人がHOKTACだった。永桶さん担い手企業は費用の三分の一を納め、実施主体のHOKTACが事業を行ない、五年後に企業側に移管する方式。月一回の現地会議もある。

販売会社を設立した。

「公共施設を建てるときに、このシステムを導入しようセールスしたい。スリム化して初期投資価格を下げて、北海道の夏は雪で冷房するのが夢。北陸方面などにもPRしていきたい」と新たな事業展開に意欲を見せる。民間企業と研究者、行政の試みを財団が支援するなかで、新たなビジネスの芽が育ちつつある。これからの公共事業を考えるうえで、雪という身近な素材を活かした取りくみは、さまざまなヒントを与えてくれる。

シンポジウムの開催などにとどまってい
るところも多い。

草創期という言葉がふさわしいクラ
スター活動は今後、試行錯誤が繰り返
されることになる。概念や理論が先行
する傾向もなくはない。類似商品のオ
ンパレードに終わった苦い経験もある。
かつての「一村一品運動」とどこが違
うのか——といった声も聞く。

HOKTACの千葉俊輔副クラスタ
事業部長はこう言う。

「新しい公共投資を国に求めたら自立
がなくなる。運動論・政策論・ビジネ

ス論の三つがないとクラスターにはな
らない。テーマは地域で決めて、我々
はアドバイザーや人の派遣などをする。

北海道には危機意識が乏しいので、い
つも「補助金なしでやれるものを」と
言ってきた。でも、そうした考えを持
っていない経営者もいて、我々は目を
覚まさせようとしている」

まさに「走りながら考え、実践する」
である。官依存、公共事業経済に偏重
した北海道から脱却し、新しい地域産
業を創るにはまだまだ課題が多い。こ
れからが本番といったところだ。



道内各地で開かれている「クラスターシンポ」
(2月25日。札幌市内で)